

はじめに

放送大学付属図書館長 柏倉康夫

「情報化社会・メディア研究」の第4号が刊行され、いわゆる「3号雑誌」のハードルを越えることができた。これもひとえにこの号の執筆者と歴代の編集委員の努力のたまものである。

この号は、投稿論文1篇、平成18年度の放送大学修士課程に提出されて合格した修士論文要旨7篇（うち、修士論文に添付された要旨1篇）、研究ノート4篇が寄せられ、ご覧頂くように充実した内容となった。これまでの3号と同じく、テーマがヴァリエティに富むことは目次に目を通していただければ一目瞭然である。

この雑誌は投稿規定をもち、掲載論文はいずれも編集委員会の審査を受けて合格した論文である。しかも掲載が認められたあとも、執筆者と担当編集員とのあいだで、不明な点や曖昧な箇所について数度のやりとりが行われる。その結果、論文は論理的でかつ読みやすいものとなっているはずである。今後もこの雑誌が日々に姿を変える私たちの情報環境をひろく対象とした論考の発表の場となることを願ってやまない。

平成19年秋、夏目漱石の「坊ちゃん」の原稿すべてを写真版にして収録した本が新書版で出版されて、多くの読者の関心をひいている。「坊ちゃん」は明治39年（1906年）に雑誌「ホトトギス」に発表されたのが最初で、それ以来100年間で繰り返し出版され、日本でもっとも読まれた小説だといわれる。漱石自筆の原稿は縦24字、横24行の原稿用紙に書かれている。自筆原稿を見ていくと、漱石の書き癖や訂正の跡が詳細にわかる。

「坊ちゃん」は、江戸っ子の主人公が四国松山の中学校の教師として赴任して、そこでの生徒とのやりとりや遭遇する事件を書いたもので、文章には松山の「な、もし」言葉などが巧みに取り入れられていて、江戸っ子の坊ちゃんの「早口の、べらんめえ調」と対称の妙を得ている。ところが原稿を注意して読んでみると、いくつかの箇所で、「な、もし」という語調を、漱石以外の誰かが書き加えていることが筆跡の違いから分かる。研究者によれば、それが「ホトトギス」の主筆であった高浜虚子によることが明らかにされている。虚子は松山の出身で漱石の親しい友人で、彼はこのほかにもいくつかの加筆をしていて、それが松山の言葉や雰囲気をもこの作品につけ加える働きをしている。このほかにも面白い発見はいくつもあり、それについては岩波の漱石全集の編纂にたずさわって来た秋山豊さんが新書本の解説で指摘している。このように作家の自筆原稿を読むのは、いわば作家の生産の現場に立ち会うようなもので大変興味深い。

もう一つ最近の例では、神奈川県の平塚市美術館で、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の手

帖が12年ぶりに公開された。展示会では、このほかにも賢治が描いた水彩画5点のほか、童話や詩の自筆原稿も展示されていた。宮沢賢治は昭和8年（1933年）に38歳で亡くなったが、この手帳は彼の死後、清書原稿をつめた大きなトランクの蓋の裏のポケットから発見されたものである。「雨ニモマケズ」は、手帳の51頁から60頁にかけて鉛筆で書かれている。

冒頭は、有名な「雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモ マケヌ」と続くのだが、手帳の原稿を見ると、最初は「雨ニマケズ、風ニマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモ」と書いて、その後すぐに、語調を整えるために、「モ」を二つ加えたのではないかと思われる。最初の2行をみると、「モ」の字が、「ニ」と「マ」の字の間のスペースに小さく書かれていることから、そう推測されるのである。手帳には横に罫が引かれていて、「モ」の字だけが3行目の「モ」と比べても明らかに字が小さい。こうした事実は、作者の自筆原稿を見て、はじめて気づくことができるのである。

こうした作業は、作者が創作した作品の意図を正確に理解する上でも作業は必要で、「生成論」、つまり、いかにテキストが変化して最終的なものに出来上がるかを探る文学研究の一方法として重要なのである。

宮沢賢治については、日本の作家・詩人のなかで一番原稿の研究が進んでいる人で、平成19年秋に、放送大学の面接授業の帰りに、花巻にある「宮沢賢治記念館」で現在開かれている童話「フランドン農学校の豚」という企画展を見てきた。展覧会には青インク、赤インク等を使い分けて、幾度も訂正の筆をいれた賢治の原稿が展示されていて、作品の変化がわかり大変参考になった。

いまや多くの人がパソコンで原稿を書くようになって、執筆から出版までの時間がすごく早くなった半面、原稿を訂正してもほとんどが上書き保存処理をされるために、自筆原稿の上で訂正の跡をたどるようには、テキストの生成過程をたどる作業が難しくなりつつある。情報機器の進展によって、テキストの研究は今後どう変わって行くか、これも情報化社会研究のひとつのテーマではなかろうか。